

brh.co.jp

表現を通して生きものを考えるセクター | サマースクール 2016年度の報告 | 催し

4～5分

表現を通して生きものを考えるセクター

「生きているってどういうこと？ 細胞の物語をつくろう」



今年の表現セクターのサマースクールでは、生きものの基本単位である細胞の物語づくりに挑戦しました。参加者は高校生から60代まで、幅広い年代の6名。1日目はまず、スタッフが細胞のはたらきについてお話し、その後、日常と細胞のはたらきを重ねて物語をつくるために、参加者のみなさんに好きな視点から「とある1日」を語っていただきました。自分自身のことや、ペットのことなど、視点はそれぞれ。そこから一人一人の暮らしの風景や興味のあることが垣間見え、お互いの個性を知る時間となりました。そのことが、作品づくりをするうえでの対話の距離が縮まるきっかけとなったと感じています。1日目の終わりにはどのように物語を紡ぐか表現方法の相談をし、6人全員のエピソードを再構成し一つの絵巻物語をつくることにしました。

また、1日目には表現セクターでの活動に加え「ハエとクモ、そしてヒトの祖先を知ろうラボ」で顕微鏡による細胞の観察を見学したり、「カエルとイモリのかたち作りを探るラボ」橋本研究員に細胞分化についてのお話を聞き、研究現場の日常にも触れることができました。



いよいよ2日目は手を動かして、一気に作品を形にする時間。物語の場面ごとに担当を分け、細胞のふるまいを絵にし、語りをつけていきました。一人一人が作業に集中する時間と全員で作品全体を見渡し、テーマを再確認したりどのように語るかを見直す時間を何度か繰り返すことで、参加者のみなさんとスタッフが丸となり作品を仕上げていきました。

出来上がった作品のタイトルは「めぐる-おっちゃんの1日」。とある中年男性の暑い夏の1日の出来事を物語の軸にすえ、そこに登場するヒマワリや藻類などの生きもののからだの中の細胞が自身のはたらきを語り出すという、日常の視点と細胞の視点を行き来するお話です。最後に、生きものからだだと地球をめぐる水に視点がうつり物語りが終わります。少し突飛なストーリーですが、一人一人の個性と表現の工夫がつまっております、「生きている」を細胞の視点から考えた2日間が凝縮された作品となりました。

一人で作るのではなく、意見を出し合い一緒につくるということはどういうことか、私自身もあらためて作品づくりについて考える時間となりました。そして、発表の場でのみなさんの生き活きとした表情から、つくること、表現すること

の喜びを改めて感じました。

川名沙羅（スタッフ）

「生きる」ことを考える素晴らしさ

参加者：T.N.



本研修に参加させていただき、「生きる」を表現する方法についてはじめてじっくりと考えることができました。生物の基本単位である細胞がどのように日常と関係があるのかを考え、表すことはとても楽しかったです。また、普段は入れない研究館のバックヤードの見学や、研究員の方のお話をお聞きし、最先端の科学に感動しました。

多様な世代や職種の参加者の皆さんと一緒に昼食を取ったり、グループワークができたことも大きな勉強になりました。会話をすることで、新しい発見があり、それが深い学びに繋がるなと実感しました。「生きる」ことを考える素晴らしさを経験し、これを多くの人に伝えたいし、これからも考え続けたいと思いました。

人間の生き方のヒントが細胞の中に

参加者：E.K.



私は中村桂子先生の言葉に出会ってからファンになり、生物学の基礎知識がないのに申し込み、近づくにつれ不安でした。けれども、スタッフの方々の暖かいサポートのお蔭で安心して参加することができました。本当に有り難く思っています。そして今、人間の生き方のヒントが細胞の中にある気がしてわくわくしています。（生命誌研究館で触発され科学に目覚めたのかなあ）憧れの中村先生にもお会いできてよかったです。私は「あがってしまって何も言えなくて」と、他の参加者の方に話すと「わかる。わかる。先生にはオーラがあるもの」と共感してくれたのでホットしました。



先日はサマースクールに参加させていただいてありがとうございました。兄が1回サマースクールに参加したことがあり、すすめられたので参加させていただきました。初めてということもあり、とても緊張しましたが、みなさんが優しく接してくださったのでとてもいい時間が過ごせました。

表現を通して生きものを考えるセクターでは今回、水の流れについて表現するというのをしました。水は生き物にとってなくてはならない存在です。その、水がどのように私達のまわりをめぐるのかをかんがえました。表現するという事は存外難しくとても苦戦しました。しかし、メンバー全員で話し合い、考えていくのは楽しくて、いい案がどんどんできました。

初めての経験ばかりで、戸惑うこともたくさんありました。しかし、楽しかったこともたくさんありました。来年、参加できるかはまだわからないけど、日にちがあえば参加したい

と思います！本当に有意義な時間をすごせました。ありがとうございました。



参加の1か月まえに知人たちと参観に来て思い立ち、全くの素人ながらサマースクールに飛び込んでみました。ひとえに、中村館長の現代社会への提言に心が響くからです。そして表現セクターで実習に入ったら、生物学の話が紹介され、一生懸命その中身をつかもうとして聞きました。この自分でもなんとか行けそうな気がして、実習は緊張せずに入っていました。人間のなかに細胞があり、様々な動きがあることを調べたとき、まるで助け合いの互助会のように細胞の中で連繋プレーが行われているように思いました。生きる方向にミクロの世界が動いている。筋細胞の絵を描いていると、その中が物語のようで、自分の意志の届かない所で、勝手に協力調和して細胞が活動している。絶妙な不思議な生命そのものを思いました。そして、それを人に伝えるのが表現セクターのやりどころなんですね。ここがないと、こんな大切なことが人に伝えられない。人びとと科学のつなぎ所。星野スタッフはじめ、皆さんに手取り足取り多大なる準備をして導いてもらいました。なにより部屋の空気が明るく、生物を愛していらっしゃる。そのひとたちの中にいて嬉しいものがありました。

館長の失敗があるから発見が生まれるという言葉にも元気をもらいました。西川顧問の講義も自分たちは生きていて何を知ろうとしてるのかの根本問題に向いているのを感じて、生きることに真面目に向き合うかんじになりました。2日間とっても幸せな時間でした。ありがとうございました。

「生きる」とは人と人との関係性の中で、自分を発現していくこと

参加者：K.T.



まず、サマースクールに参加して一番印象深かったことは、生命誌研究館のスタッフの人たちに流れる「温かさ」です。単なる体験に終わることのない、仲間づくりにつながる温かい流れがあるように感じました。

私が参加した表現セクターでは、スタッフの方々との距離がすごく近く、肩の力を抜いた話し合いの中での自由な発想を楽しむことができました。始めの会で中村館長から提示された「生きるってどういうこと？」というのを、スタッフの方々の巧みなリードのもと日常生活の中から考えさせられた2日間だったように思います。

「生きている」とは、細胞が環境と対話すること。それを「時間的視覚芸術」を意識しながら物語化していく。そんな作業はとても楽しいものでした。

また、途中に組み込んでもらった橋本研究員の発生現象についての刺激的なお話も興味深かったです。細胞について、もっと深く学びたいと思いました。

2日間やってきたことを振り返る中で、「生きる」とは人と人との関係性の中で、自分を発現していくことだと改めて気付かされました。

多くの準備と温かいご指導、本当にありがとうございました

た。



いきものとは何かがテーマでしたが、ナゾが深まるばかり。ただ、ヒトについては思ったことがある。

表現を考える過程で様々な細胞を調べた。また自分の日常を振り返る時間もあった。2つを比べ印象に残ったのは、細胞の無駄(生きるのに要らないもの)のない働きに対し自身の行動の無駄の多さだ。そういえば、人間ほど無駄をするいきものを見聞きしたことはない。こんなことを出発点にいろいろ考え「無駄を楽しい『遊び』と感じるのが1つのヒトらしさでは」と思った。だから、いくらわかりやすくても、情報の羅列をされるより、絵や劇など『情報を載せた遊び』の方が興味を引くのだろう。私はそんな表現を出来たはず...

表現を考え続ける右脳な二日間。とても楽しかったです。

これまでのサマースクール